

【 6 】

氏 名	野 上 裕 生 の がみ やす お
学位の種類	理 学 博 士
学位記番号	理 博 第 4 0 号
学位授与の日付	昭 和 36 年 9 月 26 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	理 学 研 究 科 地 質 学 鉱 物 学 専 攻
学位論文題目	Geologische und Paläontologische Untersuchung des Atetsu-Plateaus Südwestjapans (西南日本阿哲台の地質学・古生物学的研究)
論文調査委員	(主 査) 教 授 松 下 進 教 授 伊 藤 貞 市 教 授 吉 沢 甫

論 文 内 容 の 要 旨

阿哲台は西南日本内帯の数か所に分布する石炭紀・二畳紀の石灰岩台地の一つであって、岡山県西北部にある。この台地の地質については、すでに戦前から研究した人があり、戦後は詳しい研究もなされるようになったが、著者は、1956年以来この阿哲台について地質学的に、また古生物学的に、特に紡錘虫化石について徹底的に研究した。主論文はその報告である。

主論文は3部に分れている。第1部は阿哲台の上部古生界、特に二畳系阿哲石灰岩層群の層序と構造とを取り扱ったものである。著者は同地の上部古生界を上から下へ次のように区分した。

寺 内 層

砂 岩 層

頁 岩 層

阿哲石灰岩層群

二畳紀阿哲石灰岩層群

礫岩質石灰岩層

無層理石灰岩層

鱗状石灰岩層

——断層? ——

石炭紀阿哲石灰岩層群

正規石灰岩層

互層石灰岩層

輝緑疑灰岩層

時代未詳層群

それらのうち、二疊紀阿哲石灰岩層群と下部寺内層を著者は紡錘虫化石によって次の5化石帯に区分した。

Yabeina shiraiwensis 帯

Neoschwagerina douvillei-N. craticulifera 帯

Parafusulina kaerimizensis-Pseudofulina krafti 帯

Pseudofusulina vulgaris 帯

Pseudoschwagerina subsphaerica-Quasifusulina longisima ultima 帯

阿哲台の古生層は大きく向斜層をなす。断層には走向に平行のものと、それに直角のものがある。二疊紀阿哲石灰岩層群と石炭紀石灰岩層群との境は走向断層であるらしい。

第2部と第3部とは二疊紀の紡錘虫化石を、3,000枚の薄片を作って、研究した成果であって、66種を同定している。そのうち第2部は主として、Fusulininae科とSchwagerininae科に属する9属、43種を記載したものである。第3部においてはVerbeekininae科、Neoschwagerininae科その他に属する9属23種が記載されている。さらに第3部において著者は阿哲台の化石帯と他地方のそれとの対比を詳細に論じ、その結果、西南日本の二疊系を次のように分帯している。

上部二疊系

“*Lepidolina*” *toriyamai* 帯

中部二疊系

Yabeina shiraiwensis-Yabeina globosa 帯

Neoschwagerina douvillei-Neoschwagerina margaritae 帯

Neoschwagerina craticulifera 帯

下部二疊系

Parafusulina kaerimizensis-Schwagerina japonica 帯

Pseudofusulina ambigua 帯

Pseudofusulina vulgaris 帯

参考論文その1は、京都府河西町の二疊系舞鶴層群、公庄累層と中下部三疊系夜久野層群の層序と構造とを精細な野外調査と化石の同定とによって明らかにしたものである。

その2とその3とは舞鶴地帯の舞鶴層群から得られた紡錘虫化石を研究したものである。舞鶴層群は頁岩・砂岩・礫岩からなり、まれに石灰岩の小レンズを含む。舞鶴層群の紡錘虫化石には、(1)礫岩の石基から産するもの、(2)石灰岩の小レンズから出るもの、(3)礫岩の石灰岩礫に含まれている導来化石の3群の別がある。参考論文その2は(1)、(2)に属する紡錘虫11種を、その3は(3)に属するもの10種を記載したものである。(3)に属する紡錘虫は時代を異にする6群に区別され他地方の台地石灰岩のものに対比される。

論文審査の結果の要旨

主論文は西南日本内帯の数か所にあつて、紡錘虫などの化石を一般に豊富に産する石灰岩台地の一つである阿哲台の石炭系・二疊系を精査し、紡錘虫化石によって二疊系を分帯し、地質構造を明らかにしたも

のである。

西南日本の上部古生界の重要な化石は、ほとんど石灰岩のみに産するものであって、大正中期の早坂博士、大正末期の小沢博士以来行なわれた西南日本内帯の上部古生界の研究の主要なものは、秋吉石灰岩などの台地を造る厚い石灰岩の紡錘虫による化石層序学的研究である。著者の研究も同じく台地石灰岩の化石層序学的研究にほかならないが、著者の研究は次の諸点ですぐれているといえる。(1)まず著者の野外調査が、きわめて正確で綿密であること、(2)紡錘虫化石の発見・採集には、十分な時間と精力が費され、採集地の数も標本の量も多いこと、(3)紡錘虫化石の研究には特に入念であって、自ら3,000枚以上の、優秀な定方位薄片を作製し、種の同定には多数の文献のほか、自ら採集するか、入手して薄片にした他地方の標本を比較に使用したことなどである。著者の薄片は外国の優秀なものに劣らず、その同定は確実であって、十分に信頼できる。したがって、従来行なわれた西南日本内帯各地の台地石灰岩の化石層序学的研究のうち、最もすぐれたものの一つといえよう。

参考論文3編のうち、一つは二畳系と三畳系の層序を綿密な野外調査と化石の同定によって研究したものであって、他の二つは阿哲台産ではないが、紡錘虫化石の研究であって、主論文の基礎をなしている。

要するに、野上裕生は着実正確な方法によって台地石灰岩の化石層序学的研究を行ない、みごとな成果をおさめ、地史学に新知見を加え、大きい寄与をした。

よって、本論文は理学博士の学位論文として価値があるものと認める。